

(仮訳)

“Hence through the garden I was drawn,
 A realm of pleasance, many a mound,
 And many a shadow-chequeréd lawn
 Full of the city’s stilly sound;
 And deep myrrh thickets blowing round
 The stately cedar, tamarisks,
 Thick rosaries of scented thorn,
 Tall orient shrubs and obelisks,
 Graven with emblems of the time.”

LORD TENNYSON

そして庭園の中へと私は引き込まれ
 それは一つの王国、そこには遊歩道、多くの丘
 そして縞模様の影を落とした芝生の広がり
 都会の静かな音で満ち溢れ；
 そして深いミルラの茂みは風に揺れている
 堂々たるシーダー、タマリスク [ギョリュウ]
 芳しい棘を持つバラのこんもりとした花園
 背の高いオリエントの茂みとオベリスク
 時の紋章が刻み込まれて

テニスン卿

過去 100 年間のガーデニングの発展は極めて著しく、かつ急速であったため、そのあらゆる分野についてさっと概観するだけでもほとんど際限のない仕事となる。植物学と分類方法の飛躍的な進歩、栽培方法の改良、熱帯気候からの数限りない宝物を保存するための膨大な数の温室とストーブ、フラワーガーデンを彩るために世界各地から集められた無数の植物、そして年々改良され付け加えられ次々と現れる花の数々、これらすべてのことが重なり合って 19 世紀の庭園を今ある姿にしているのである。私たちは先人たちの庭園を称賛し、またその中にどれだけ多くの敬服し模倣すべきものがあるかを既に見てきたが、近年付け加えられてきた多くの花という宝物が私たちの庭園から奪われることを想像することは難しい。多くの花があまりにも身近になってしまったので、花のない庭園など思い描くことは難しいが、今ほとんどどこでも見ることができる植物の数々は 100 年前にはわが国の海岸には到達していなかった。このような変化をもたらすために、多くの人々がそれぞれの持ち場で働き、それぞれがガーデニングの進歩に何らかの貢献をしてきた。現場の庭師や種苗業者、偉大な植物学者や学識と大胆さを持った人々、科学の大義のために命を危険にさらし、彼らの勇気と忍耐のおかげで我われは現代の庭園のこんなに多くもの宝物を手に行っている。



[図 13-1] アーリー 昔風の整形形式で 50 年前に設計された庭園

風景式庭園に対する人気が頂点に達していた時、園芸の仕事に、騒ぎ立てたりはしないが忙しく取り組んでいる現場の庭師たちが大勢いた。このような一人がアーバクロンビー Abercrombie [1726 ~ 1806 年] であり、彼の書いたものは何年間も人気が高かった。彼はエディンバラ近くで [野菜、果物、花を生産する] 市場向け近郊農家 market gardener の息子であり、1726 年に生まれた。プレストンパンズの戦い Battle of Preston Pans は彼の父の庭園の壁に近接した場所で戦われ、その時彼はそこにいた。庭師としての最初の勤めはサー・ジェームズ・ダグラス Sir James Douglas のところであり、後に彼は前の雇い主の親戚と結婚した。1770 年にはマイルエンドとハクニ の間の土地に家族とともに居を定め、そこで種苗園を始めた。家族には 2 人の息子と 16 人の娘がいた。彼の最初の本『誰でもが自分の庭師』*Every Man his own Gardener* は 1767 年に出版されたが、彼は失敗することを極度に恐れたのでリーズ公爵 [1713 ~ 89 年] の庭師のモー Mawe に 20 ポンド払って、本の扉のページに彼の名前を出させてもらった。このため本書は、アーバクロンビーが全部ひとりで書いたのにモーとアーバクロンビーの著作として知られることになった。彼のこのほかの著作としては、『素人のためのガーデニング』*Amateur Gardening*、『庭師のための毎日のお手伝い』*The Gardener's Daily Assistant* など同種の本が同じように人気があった。

ウィリアム・ハンベリー Wm. Hanbury [1725 ~ 78 年] が書いた当時の別の本にも数多くの木、低木、多年草・一年草の耐寒性の花、および温室・暖房温室の植物の栽培について詳しい方法が述べられている (*『植栽とガーデニング全解』ウィリアム・ハンベリー 1770 年 2 巻 フォリオ版 *Complete Body of Planting and Gardening*)。これらの本の中で取り上げられている植物の中には、新しく持ち込まれたばかりの植物がたくさん含まれていることがわかる。たとえば、黒海シャクナゲ Pontic Rhododendron、ピンクアザレア *Azalea nudiflora*、あるいはハンベリーが「アメリカスイカズラ」American upright honeysuckle と呼んだものなどである；ヒメシャクナゲ *Andromeda polifolia*、クロバナロウバイ類 *Allspice* (*Calycanthus*) の各種、アメリカハゼノキ [ウルシ類] *Sumach* (*Rhus*) やタイサンボク類 *Magnolia* (*grandiflora* など)、アサガラ類 [スノードロップツリー エゴノキ科] (*Halesia*)、アジサイ類 *Hydrangias*、シモツケ類 *Spireas* などの耐寒性植物である。半耐寒性および暖房温室の植物についても多くの新しく追加されたものがあった。アフリカハマユウ *Crinum capense*、別名「ツルボランユリ」lily *Asphodel*、そしてもっと寒さに弱いベラドンナユリ [ホンアママリ] *Belladonna lily* (*Amaryllis Belladonna*)、スカーバラユリ [アマリリス類] *Scarborough lily* (*Vallota purpurea*) はこの頃登場した；ガンジーユリ [ネリネ] *Guernsey lily* (*Nerine sarniensis*) の原種については、1659 年頃日本から来た船が難破し、そこから岸に流れ着いた球根からガンジー島で育ったと言われたが、これと同様にその原種について同じような話が語られている。ツバキ、別名「日本のバラ」(*Camellia japonica*) は 18 世紀半ばまでには栽培されていた。「クチナシ *gardenia*、別名ケープジャスミン *Cape Jasmine*」(*Gardenia florida*) [学名は *Gardenia jasminoides* も使用されている]、アカマツリ [ルリマツリ属] *Plumbago* (*rosea*) とその他「ルリマツリ属の寒さに弱い品種」、グロリオサ [キツネユリ] *Gloriosa superba*、およびアラマンダ [アリアケカズラ キョウチクトウ科] *Allamanda* (*Allamanda cathartica*) はストーブ温室を飾る登攀性植物の仲間であった。

植物の科 families の中には特に注目を集めた結果、その植物に関する特別の文献が書かれるものまで出てきた。ゼラニウムとヒース [エリカ類] はアンドルー Andrews [活動期 1794 ~ 1830 年] によって、マツバギク類 *Mesembryanthemums* はハワース Haworth [1767 ~ 1833 年] によって、プロテア *Proteae* はナイトによって扱われた。果樹園に関する文献も有能な書き手によって書かれた。ポートランド公爵 Duke of Portland [1738 ~ 1809 年] の庭師であるスピーチリー *Speechly* [1735 ~ 1819 年] は松とブドウの木の論文の筆者であった。彼はウェルベックで栽培されているブドウの 50 の品種について書き、当時イングランドで見ることができる多くの立派なブドウの木についても触れている (*『ブドウの木の栽培』ウィリアム・スピーチリー著 ヨーク 1790 年)。エセックスのヴァレンタインにおけるブラックハンバー *Black Hamburgh* はハンプトンコートのブドウの親株であり、大変多くの実をつけたので庭師は房を売ることで 1 年間に 100 ポンド得ることも珍しくなかった。館の外のノーサラートン *Northallerton* におけるブドウ栽培は 1789 年時点で 137 平方ヤードの壁を覆っていた+

†ファウラー博士が私に述べたところでは、家の壁を覆っているとても大きなブドウの木は現在もノーサラートンに存在しており、それがここで言及されているものであるかも知れない。

彼はバースの近くのブドウ畑のことも気がついている。これもサマセットのサー・ウィリアム・バセット Sir William Basset [1628 ~ 93 年] の所有であり毎年、数ホッグズヘッド [1 ホッグズヘッド = 約 240 リットル] のワインを作っており、ペインズヒル (有名な風景式庭園) のチャールズ・ハミルトン閣下は「ブルゴーニュ」と「ブラッククラスター」のブドウからワインを作り、ボトル 1 本 7 シリング 6 セントから 10 シリングで売られた。スピーチリー自身もウェルベックで、有名なブドウの房を栽培しており、1781 年にその重さは 19½ ポンドあり、直径は 20 インチあった。それはポートランド公爵によりロッキングラム侯爵 Marquess of Rockingham [1730 ~ 82 年] のもとに人の手によって運ばれ、それは約束の地から帰って来る偵察たち spies [訳注] のようであった。この世紀の初期においてはブドウは海外から持ち込まれ、ヨークシャー州のキャノンホール Cannon Hall に植えられたので、その後その名前を付して有名になった品種を生産し続けた。ハインズ Haynes はイチゴ、グーズベリー、ラズベリーについて書いた。イチゴは品種改良が大いに進み、新しい大粒の品種がヴァージニア種と 19 世紀初頭に持ち込まれたチリ種とを掛け合わせることで生産された。昔式の庭園では依然としてハウボイイチゴ hautboy (*Fragaria elatior*) を植えていたが、今はほとんど見られることもなく、粒の大きいアメリカ種に完全に席巻されてしまった。

[訳注 : 旧約聖書中の民数記に、約束の地カナンの偵察に行った帰りにブドウの房を持って帰ったが、あまりに大きくて二人がかりで運んだという話がある。なお、ヘブライ語の訳語として spy はやや不正確、偵察を意味する scout とか observer が適切とされる]

果樹に関する優れた著作としては、巧みに描かれたカラーの図版付きのブルックショー Brookshaw [1751 ~ 1823 年] による『英国の果樹』 *Pomona Britannica*、1817 年がある。この本は主にハンプトンコートの王室庭園で栽培されている果物を描いたものである。本書においては、当時極めて新しかったいくつかの品種のほかに、昔好まれた多くのものの絵が掲載されている。「キャサリン梨」の絵には 8 月に熟す、「甘くてジューシーで、ややジャコウの香りもする : しかしよく言っても普通の梨としか思われていない」と記されている。「昔のニューイントン桃」、「公爵サ克蘭ボ」、「ノーフォークビーフィンリング」、「赤縞ピピン」ほか多くのものがまだ好まれており、トラデスカントのサ克蘭ボについてブルックショーはこう書いている : 「これより優れたブラックチェリーがわが国にあるかどうか私は疑問だが、それは大変希少でまたほとんど知られていないので、これを探し出すことは最も難しい仕事となるだろう。これはチャールズ 2 世の庭師であったサー・ジョン・トラデスカントにより栽培されていたサ克蘭ボであり、ほかのブラックチェリーと比べると違った形をしており ; その香りはほかのサ克蘭ボとは似ていなかった ; そして 6 月

20 日頃に熟した」。このような多くの果物と野菜に関する歴史は、このテーマについて何冊か貴重な本を書いてきたフィリップス [1779 頃 ~ 1840 年] により伝え継がれてきた*。

*『英国の果樹園』*Pomarium Britannicum*, 1820 年、『栽培野菜の歴史』*History of Cultivated Vegetables*, 1822 年、『花の咲く木の森』*Sylva Florifera*, 1823 年、『花の歴史』*Flora Historica*, 1824 年ほか すべてヘンリー・フィリップス著

主として果樹に対して注意を向けたもう一人の庭師はウィリアム・フォーサイス William Forsyth (1737-1804 年) であった。彼はミラーの後任としてチェルシー庭園の園長を引き継ぎ、その後ケンジントンの王室庭園師に任命された。彼の果樹に関する、また木の仕立て方や刈り込みの最善の方法に関する著作は何回も版を重ねた。果物栽培の改良について、ナイトはフォーサイスの木の取り扱い方について賛成しない点もいくつかあったが、ほかのどの庭師よりも多くのことを成したと言われている。トーマス・アンドルー・ナイト Thomas Andrew Knight [1759 ~ 1838 年] は園芸協会の会長であり、彼自身、果物、特にリンゴの改良者であった。1802 年には黄金色ピピンとオレンジピピンの掛け合わせでグランジェリンゴを創り出した。ガーデニングの歴史学者であったジョージ・ジョンソンはナイトに著作を献呈し、ナイトのことを「ガーデニング作業を支える最も完全な科学知識をガーデニング作業の知識へと結びつけた」人物であると情熱的な言葉で語った († 『イングリッシュガーデニングの歴史』ジョージ・W・ジョンソン著 1829 年)。「この優れた野菜生理学者」のおかげで園芸協会 Horticultural Society が創設された。1759 年、ヘレフォードシャー州に生まれ果樹園の中で育ったナイトは幼い頃より木々の成長を見始めるとともに、実験することを始めた。彼は園芸に対して何か刺激が足りないと感じ、「あらゆる分野で園芸の改良を目的とするような」*協会の設立がその役に立つであろうと考えた。

*『王立園芸協会に関する本』アンドルー・マリー著 1863 年 *The Book of the Royal Horticultural Society*, By Andrew Murray

その結果、サー・ジョーゼフ・バンクス [1740 ~ 1820 年] の協力を得て、ナイトは園芸協会を組織し、1804 年 3 月 7 日創立のための会議が開かれた。初代会長はダートマス伯爵 [1731 ~ 1801 年] で、ジョン・ウェッジウッド [1766 ~ 1844 年] が第一会計担当、またクリーブが第一事務局長であったが、すぐに R. A. ソールズベリー [1761 ~ 1829 年] に取って代わられた。リンネ協会の事務局員であったプライスは同時に新園芸協会の事務局員でもあった。1809 年 4 月 17 日、団体設立の設立勅許状が国王ジョージ 3 世 [在位 1760 ~ 1820 年] の署名を得た。翌年『会報』*Transactions* 第 1 号が発行された。これらの 4 つ折り版の本は豪華に仕上げられ、とんでもなく費用がかかったので 1830 年までにそのための費用合計は 25,250 ポンドに達した †。

†現在の協会事務局長補のジョン・ウェザー氏のご厚意により提供された覚書より

1811年ダートマス伯爵の死に伴い、トーマス・アンドルー・ナイトが会長に選ばれた。彼の精力的な会長としての働きにより協会の活動は大いに進展した。1818年には最初の実験的庭園がケンジントンとイーリングで開始されたが、4年後協会がチズウィックの庭園を長期賃借してそこで実験を進めたので、最初の実験は途絶えることになった。

時を同じくして、協会はその最大の仕事を始めることになる。それは海外から植物を受け取るだけでなく、収集家を派遣することであった。フジ *Wistaria* (*Wistaria sinensis*) の最初の木はリーヴズ氏 Reeves [1774~1856年] により中国から1818年に送られてきた。そのオリジナルな品種は今もチズウィックにあり、またその他の中国の植物 - シャクヤク、バラ、菊 - も海外から受け取ったものであった。最初に派遣された収集家はジョージ・ドン George Don [1798~1856年] で、1822年から23年にかけて西アフリカ、さらに南アメリカに行った。ジョン・フォーブス John Forbes [1798~1823年] は同年東アフリカへ派遣された；彼はザンビアを旅行中に亡くなったが、それは新品種を母国へ送ってしまった後だった。ジョン・ポッツは中国と東インド諸島に植物を探しに行き、彼も気候の影響で亡くなった。ジョン・ダンピア・パークスは彼について中国に行き、ジェームズ・ロウはアメリカとサンドウィッチ諸島 [ハワイの旧称] で探し回ることに成功した。有名な収集家であるデイビッド・ダグラス David Douglas [1799~1834年] も園芸協会に雇われた。彼は1799年スコーン Scone に生まれ、子どもの頃に、当時グラスゴー大学教授であったサー・ウィリアム・フッカー Sir William Hooker [1785~1865年] の目に留まった。フッカーは彼を協会事務局長のジョーゼフ・サビーネに推薦し、ダグラスは北アメリカとカリフォルニアに派遣された。そこで彼が発見した木や花の植物の宝庫は前例のないほどのものであった。彼が本国へ送った針葉樹 conifers の数は途方もないものであり、ある時フッカーに「私が勝手に松を製造していると思いはじめたらっしやるかも知れない」と書いた。よく知られているダグラスファー (*Abies Douglasii*) [学名からはモミの仲間ダグラスファー、一般的にはダグラスファーはベイマツ (トガサウラ属) を指す] のほかにも、多くの松の木の仲間がこの国を豊かにした。たとえばサトウマツ [シュガーパイン] *Pinus Lambertiana*、モントレーマツ *Pinus insignis*、ポンデローサマツ *Pinus ponderosa*、サビンマツ [グレイマツ] *Pinus Sabiniana*、ノーブルファー *Picea nobilis*、グランドファー *Pinus grandis*、美しいセコイア *Taxodium sempervirens*、さらにもっと多くのものがイングランドのあらゆる場所の松林や森を飾っている。ドロップモアでは園芸協会からグレンヴィル卿 Lord Grenville [1759~1834年] に1827年に渡された種から育てられた松がある。この木は1830年に苗床から地面に移植され、1886年には高さ124フィート、周囲15フィートの木となった。これらの素晴らしい針葉樹のほかにも、ダグラスのおかげと言える多くの植物というものがある (*植物については『北アメリカの花』 *Flora Boreali Americana* や『植物マガジン』 *Botanical Magazine* にフッカーによる記述がある)。現在ではごく普通になった赤い花をつけるスグリ類 *Ribes* を彼は本国に送った；またカロコルタス [バタフライチューリップ] *Calochorti*、クラークア [サンジソウ アカバナ科] *Clarkias*、テンニンギク *Gaillardias*、ゴデチア [イロマツヨイ ア

カバナ科] Godetias、コリンシア [オオバコ科] Collinsias、ルピナス Lupines、ハナビシソウ Eschscholtzias、ミゾホオズキ [ハエドクソウ科] Mimuli および ペンステモン [ツチガネヤナギ オオバコ科] Pentstemons も送られた。アメリカで何年もの間探した後、彼はさらなる宝物を求めてサンドウィッチ諸島へと向かい、1834年にそこに到着してしばらくして大変悲惨な死を迎えた。彼は現地人が野生の動物を捕まえるために掘った深い穴に落ち、その中にいた動物により殺された。これほど多くの貢献をした人物が悲劇的な最期を遂げたにもかかわらず、異国において命懸けで植物探しをする人々の足を止めることにはならなかった。カリフォルニアではテオドール・ハートヴェック Theodor Hartweg [1812 ~ 71 年] によりさらに多くの松の仲間が収集された。ベントミアナマツ Pinus Benthamiana、ミチョアカナマツ Pinus Devoniana などである；またルピナス Lupines、ヘビノボラズ Berberries、フクシア Fuchsias、それと何種類かのアキメネス [ハナギリソウ イワタバコ科] Achimenes が彼により発見された。

おそらくすべての冒険的な収集家の中で最も成功した人物と言えはロバート・フォーチュン Robert Fortune [1812 ~ 80 年] である。彼は 1813 年 [?] に生まれ、1880 年に亡くなった。最初エディンバラの植物園に入り、その後チズウィックの温室の管理者になった。1842 年彼は中国へと出発し、それからの数年間、手に入れたばかりの宝物を本国に絶え間なく送り続けた。庭園の花として一番知られているいくつかの花は彼のおかげによるものである：シユウメイギク *Anemone japonica*、タイツリソウ [ケマンソウ] *Dielytra* (or *Dicentra) spectabilis*、ヤマブキ *Kerria japonica*、各種のサクラ類 *Prunus*、ガマズミ類 *Viburnum*、シモツケ類 *Spirea* その他多くのツツジ類、キク類、ガーデニア [ヤエクチナシ] *Gardenia Fortuniana*、ジンチョウゲ類 *Daphne Fortuni*、ホソバヒイラギナンテン *Berberis Fortuni*、シナレンギョウ *Forsythia viridissima* ウェイゲラロゼア [タニウツギ類] *Weigela rosea*、オウバイ *Jasminum nudiflorum*、フジ *Wistaria* の白い品種、そしてその他多くの貴重な植物である。彼の最大の功績は中国人に変装して Loo Chow [廬州 (luzhou) 現在の安徽省合肥市] に行き、そこで二重咲の黄色のバラと、彼の名前を付けた扇形の葉をしたヤシ、シユロ *Chusan palm* を手に入れたことであった。その時以来、こういう発見の仕事は専門家の手によって行われてきている。ロブ兄弟の二人はヴィーチュのために 20 年以上収集を続け、多くの新しいものを持ち込んだ。トーマス・ロブ Thomas Lobb [1820 ~ 94 年] は旧世界、インド、ビルマ、フィリピン諸島に調査を限定し多くの新種のランを発見した。ウィリアム・ロブ William Lobb [1809 ~ 64 年] は主に南アメリカとカリフォルニアで仕事をし、新種の発見、特に自分の名前を付したクロベ類 *Thuia* に加えて、ダグラスが発見した針葉樹の多くの球果 (松かさ) と種をはじめて大量に本国に送った。あわせてラパゲリア [ツバキカズラ チリの国花] *Lapageria rosea*、エスカロニア [イスカノキ エスカロニア科] *Escallonia macrantha*、スパイニー・デスフォンタイニア [コルメリア科] *Desfontainea spinosa*、ダーウィンメギ *Berberis Darwinii* など、今はよく知られている数多くの新種の植物を入手することに成功した。シッキムシャクナゲ *Sikkim*

Rhododendrons や多数のヒマラヤの植物はサー・ジョセフ・フッカー Sir Joseph Hooker [1817 ~ 1911 年] のおかげである。F. C. バービッジ氏 Burbidge [1847 ~ 1905 年] は多くの宝物、特にボルネオのものに光を当てた ; エドワード・ウィットタル氏 Edward Whittall [1851 ~ 1917 年] はスマルナで小アジアの魅力的な耐寒性の球根をたくさん送り、この科学の分野ではまだ極めて多くの人々が活発に働いていた。

我われの庭園のバラの数は今や無限にあり、その極めて大きな割合のものが今世紀になってこの国で知られるようになったに過ぎないのである。昔からの品種、フランス Gallica、ダマスク the Damask、サルファレア Sulphurea、スコッチ Scotch、オーストリア Austrian、モス Moss、センパヴィレンス Sempervirens そして ジャコウ Musk に加え、現在では数限りない交配種のほかに多くの品種というものが存在している。新品種のほとんどが東アジアからわが国にやって来た。小さなバンクシアローズ Banksian Rose は中国から 1807 年に、より小さいフェアリーローズ Fairy Rose は 1810 年に到来した ; お茶の香りのバラはほぼ同じ頃、マンスリーローズ Monthly Rose は 1789 年に、ノイバラ multiflora [rose] は 1822 年という具合である。そこから多数の品種が付け加わり、ブルソール Boursault's、ノワゼット Noisette、ノイバラ Polyantha [*Rosa polyantha*]、ブルボン Bourbon などである。有名な種苗業者であったハクニ のロディジーズ Loddigies の 1826 年のカタログには、「1393 を下回らない品種と変種のバラ」が、彼らの種苗には番号を付けて植えてあり、またハンマースミスのリーのところにもたくさんあった。それ以来バラの品種は毎年どんどん増え続けていった。1861 年から 2 年にかけてポール Paul [1882 ~ 1905 年] * は 62 もの新品種を持ち帰り、そして次の 10 年間の間にさらにもっと付け加え、その中にはマレシャルニエル Marechal Niel、ルイファンハウテ Louis Van Houtte、ポールネイロン Paul Neyron のような人気のある品種が含まれていた。このおびただしい数の新しいバラは今も毎年付け加えられてきており、これにより甘いモスローズ Moss Rose やダマスク Damask のような昔のバラの多くが消え去ってしまった。これらは交配種の四季咲きバラやティーローズ [香りのするバラの総称。19 世紀中国からもたらされた品種類] teas と同じく、然るべき居場所があってもよいと思われるのにである。

* 『バラの庭』 *The Rose Garden* ウィリアム・ポール著 第 9 版 1888 年

ダリア† はメキシコの原生種で、最初は 1789 年にスペインからビュート夫人により持ち込まれたが失われてしまい、1804 年にホルランド夫人により再び持ち込まれ、20 年後にこれらの花に対する熱狂が最高潮に達した。フクシア Fuchsia は 1825 年までにはこの国に姿を現していたが、フックス Fuchs [1501 ~ 1566 年] にちなんでプリュミエが名付けたのは 100 年ほど前のことであった。お話としては、ワッピングの、ある小さな家の窓にフクシアの植物があるのをリー Lee [1715 ~ 95 年] がどのように見たかが語られている。彼はその花にいたく感動したのでその家に入り、持ち主である老婦人に売ってくれないか聞いた。しかし彼女はそれを手放すことを最初は断った。と言うのもそれは船乗りである彼女の夫から

送られてきたものであったからであるが、彼が 8 ギニーを差し出し、彼が育てて最初の 2 株を彼女にあげることを約束したので婦人は説得されて彼の所有物にすることに同意した。彼は約 300 本の挿し木用の切り枝 cuttings を根づかせることに成功し、老婦人に彼女の取り分をあげ、残りは上品なハンギングフラワーにして、彼の種苗園を訪れる人たちを驚かせた。これにより彼は 300 ポンドばかりの利益を得た (**N. and Q.* 1894 年 9 月)
† 名前はスウェーデンの植物学者ダール Dahl にちなんで名付けられ、サミュエル・デイル博士 Dr. Samuel Dale (1659 ~ 1739 年) にちなむデイリア Dalea [マメ科] とはまったく別物である。

15 世紀の庭師が、もしほんの僅かでも見るのができたら多分最も驚くであろうと思われ
るのはランの温室であろう。 今日見られる数多くのランのうち、ほぼすべてのものが過去 50 年間に輸入されたものである。まだ探索がなされていない国の地帯というものはまだ残されているが、地球上でランが育っている地域の大半はくまなく探し終えられ、これらの栄光に満ちた植物は何千も包まれてこの国へと送られ、場合によっては原生種の生育地を裸地にしてしまうこともあった。 地区全体からこれらの宝物がすっかり持っていかれた様子の記録がある；たとえば、ある土地では昔はミルトニア *Miltonia vexillaria* の生育地であったところがひどく略奪されたため、近くの森が「きれいさっぱりと取り除かれてしまった」。ある時オドントグロッサム *Odontoglossum crispum* を探している最中に、1 万の植物が収集された時には、それを入手するため 4000 本の木が切り倒され、探索者たちのキャンプは、その付近の植物を採り尽くすたびに毎週移動した†。多くのランのハンターを喜ばせた、この栄光に満ちた花の財産の光景は、探索者たちが旧世界と新世界の手付かずの林に対して求めるものがもっと控え目でない限り、未来の世代からは拒絶されるであろう。
† 『ランのハンターの旅と冒険』アルバート・ミリカン著 1891 年 *Travels and Adventures of an Orchid Hunter*, By Albert Millican

この国で初めて開花した熱帯のランはブレティア・ベレクンダ *Bletia verecunda* という品種であり、1731 年にバハマ諸島の一つであるプロヴィデンス島からピーター・コリンソン Peter Collinson [1694 ~ 1768 年] 宛てに送られたものであった († W. B. ヘムスリー 『庭師年代記』 1887 年 W. B. Hemsley, *Gardener's Chronicle*)。ミラーの辞書には 2、3 の熱帯のランの記述があり、彼自身の手でチェルシーで育てられたものもあった。「ニュースペインのカルタジーナ」から彼の元へ送られてきたバニラ [ラン科] *Vanilla* について彼が語ったところでは「この植物はチェルシー庭園で花開いたものの、正しく手入れされなかったので 1 年しかもたなかった」。1778 年ドクター・ジョン・フォザギル John Fothergill [1712 ~ 80 年] が中国から 2 品種持ち帰り、そのうちの一つ、ファイウス [カクチョウラン] *Phaius grandifolius* はヨークシャー州アパリーブリッジ Apperley Bridge に住む彼の姪であるハード夫人のストーブ温室ですぐに開花した。1787 年エピデンドラム・コクレアツム *Epidendrum cochleatum* がキュー王室庭園で開花し (* 『ラン科植物のマニュアル』 第 10 部 ジ

エイムズ・ヴィーチ商会著 1894 年 *A Manual of Orchidaceous Plants*, By James Veitch and Sons)、エピデンドラム・フラグランス *Epidendrum fragrans* は次の年に開花した。今世紀初頭間もなく、ハクニ のロディジーズにより何品種か販売用に栽培され、この商会は何年にもわたりランの栽培家の間では特に名の知られた場所となった。1812 年までにはモンテヴィデオからもたらされたオンシジウム *Oncidium bifolium* という植物を育て、同じ頃バンダ類 *Vandas*、エリデス類 *Aërides*、デンドロビウム類 *Dendrobium* が初めてインドからドクター・ロクスバラ Roxburgh[1751 ~ 1815 年]により送られてきた。多くのラン科の植物が 1830 年までの間にこの国にやって来たが、それらの原生地やその生育環境についてはほとんどわからなかったので、その栽培というものは困難を極め、ランの栽培家は常に失敗に見舞われた。キューではそのために別の温室が用意され、園芸協会のリンドリー Lindley [1799 ~ 1865 年] もまた、ランの習性を注意深く研究することで正しい育て方を発見しようと努めた。最も早い時期に作られた個人所有のランの温室で、ウェントワース・ウッドハウスにあるフィッツウィリアム伯爵 Earl Fitzwilliam のものがその一つであり、ミルトニア属は彼に敬意を表して名付けられた。彼の庭師であるジョーゼフ・クーパーはその栽培に初めて成功した一人であった。1833 年チャッツワースのランのコレクションが始まった。デヴォンシャー公爵は東洋から植物を調達し、当時の彼の庭師パックストンは多くのものを栽培するのに成功し、彼が編集した『植物マガジン』 *Magazine of Botany* に興味深い記録を公表した。それ以来成功したランの栽培家は数限りなく名前を挙げることもできない。サー・トレヴァー・ローレンス Sir Trevor Lawrence[1831 ~ 1913 年] やシュレーダー男爵 Baron Schroeder[1825 ~ 1910 年] のコレクションのようなものは 19 世紀の不思議の一つである。

これらのランの多くが持ち込まれた歴史は胸躍る冒険物語かおとぎ話を読んでいるようである。失われたラン、(真の) カトレヤ・ラビアータ *Cattleya labiata vera* の話はすべてのラン愛好家に知られている。この植物は、元はと言えばブラジルから本国に、W. スウェインソン Swainson [1789 ~ 1855 年] からリンドリー博士宛てに、1818 年、地衣類の周りのパッキングとして送られたもので(『ランについて』フレデリック・ボイル著 1893 年 *About Orchids*. By Frederick Boyle)、リンドリーはそのことを記し、偉大な園芸家カトレイ氏 Cattley [1788 ~ 1835 年] の思い出としてその名前を付けた。ほかの品種が本国に送られた後、数年間本物のラビアータを求めて過ぎたが、それはもはや「真の」“vera”は栽培されていないこと、そしてその原生地が忘れられてしまったことが発見された後であった。50 年間にわたりこの宝物を再び見つけることがすべてのコレクターの目的であった。偶然ついに 1889 年に、パリの M. モロー Moreau のところに何某かの植物が送られたが、そのモローからサンダーズ商会 Messrs. Sanders はその生育地について学び、それを探して送り出し、そして間もなくすべてのラン栽培家が自分たちのコレクションに長い間失われていた宝物を付け加えることができたのであった。この世のものとも思えない花を求めて、数多くの実りのない航海が行われ、そしてコレクターがまったく期待していない時に、ついに求めているものに出会うということがしばしばあった。アツモリソウ類 *Cypripedium Curtisi* という一つ

の植物がペナンからカーティス氏 Curtis [1853 ~ 1923 年] により 1882 年に本国に送られてきて、その後コレクターたちがこれを見つけることを完全に諦めるまで一つも出てこなかった。そしてついにエリクソンがスマトラのある山を登っていて、小さな小屋で休みをとることにした。するとその壁に、そこで休憩した旅行者たちの名前の中に、彼は自分が探していたまさにその花の絵が描かれているのを見つけ、その下には「この建物の飾りとして C. C. の贈り物」と書かれていた。彼は直ちにその近辺でその花を探す仕事に取り掛かり、諦めて家に帰ろうとしたまさにその時に、ついにとてもありそうもない場所にその花を見つけたのであった。このような話は無限に拡大できるようなもので、それは毎年コレクターたちがこれらの植物を求めるために苦痛に満ちた遠征を続けていたからである。一つの会社、セントオールバンズのサンダーズ商会だけが、いっぺんに 20 人ものコレクターが働いていることが珍しくない会社である。1894 年の春には、ブラジルに 2 人、コロンビアに 2 人、ペルーとエクアドルに 2 人、メキシコに 1 人、マダガスカルに 1 人、ニューギニアに 1 人、インド、ビルマ、海峡植民地 [シンガポール、ペナン、マラッカなど] に 3 人派遣していた。イングランドで現在栽培されているランの数の推計を行うためには、すべての熱帯地方から本国に送られてくるそれらの品種に加え、数多くの交配種を勘定に入れなければならない。交配種については、ヴィーチ、ブル、あるいはロウと言った大きな園芸業者からのものと、個人のコレクションからのものが毎年生み出されている。

ガーデニングのあらゆる分野で変化は急激になってきていた。現在花屋で見る様々な品種というものは今世紀の初頭には知られていなかった。それはベゴニア、グロキシニア [イワタバコ科] *Gloxinia*、ゼラニウム、シクラメン、シネリア、プリムラ、ストレプトカーパス [ウシノシタ イワタバコ科] *Streptocarpus*、カーネーション、アキメネス、菊、ヴィオラ、ダリア、アスター、バーベナなど多くの似た品種である。ドナルド・ビートン Donald Beaton [1802 ~ 63 年] は 1854 年に、庭師としての彼の若い頃の人生の思い出を書いているが、マンチェスター近くのロウアーポートンで、この国で一番最初に開花したペチュニアを見たこと、エプサム種苗園で初めて見たカルセオラリア [キンチャクソウ ゴマノハグサ科] *Calceolari* のことをいかに覚えているか語っている。展示会と功績表彰という仕組みが花卉栽培者のエネルギーを刺激し、新品種の生産を推進した大きな効果について疑う余地はない。カーネーションなどの花の栽培に関する 1820 年のトーマス・ホッグ Thomas Hogg [1777 ~ 1855 年] の論文で、イズリントンとチェルシーの 2 つの「花卉栽培者協会」のルールを示している。それは数年前に始められたもので「プリムラアウリキュラ *Auricula*、ナデシコおよびカーネーション」の栽培を推進するためのものであった。彼の言によれば「ロンドン近辺には同じ種類の協会はほかにもいくつかあるが、この 2 つは会員数が最も多いだけでなく、その構成会員に関して最も名声が高い」ものである。会費は年間 1 ポンド 11 シリング 6 ペンスで、6 つある賞金額は展示会の日に成功した候補者に贈呈された。指定された日に晩餐会が開かれ、各会員はプリムラアウリキュラ、ナデシコおよびカーネーション展のディナーチケットを買わなくてはならなかった。花の審査は出席者の中から

選ばれた 3 人の会員により行われ、全員が晚餐のため座っている中を花がテーブルに回され、「各人がその花をはっきりと見られるようにするため、まず会長の右から始まり、そして左側に戻って来るように回される」。それ以来多くの協会が創設されたが、それはいろいろと異なる種類の花を育てる花卉栽培者の品種の多様性をテコ入れするためであった。これらの中で多分最も目覚ましい協会はバラに関するもので、より最近では菊に関するもので、両者は現在、全国協会を組織するまでになっている。全国菊協会 National Chrysanthemum Society はストーク・ニューイントンがその発祥の地である。ロンドンのその土地柄は、ローベルとフェアチャイルドの時代以来、そしてロディーズに至るまで、何世紀にもわたり庭園のたまり場で、その古き伝統というものを忘れることがなかった；霧と煤煙の真ただ中であってさえ、ロンドン東部の住人たちは花を栽培しようとした。彼らの大いなる関心は菊で、彼らは菊の栽培に成功したことは、地方展示会を見ればわかることである*。園芸協会が初めて「催し」*fête* を開催したのが 1831 年で、その後しばらくして定期的な展示会が開始された。それ以来彼らの展示会や植物協会 the Botanical Society のもの、イングランドのあらゆる町や村の地方協会のものが年中行事になり、それどころかほとんど毎週の行事になり、これらの組織により推進された花卉園芸への刺激というものは誰の目にも明らかであったに違いない。ロンドン植物協会は 1839 年に設立された。植物の科目 Natural Orders を説明するために割り当てられた敷地の部分は、当時事務局長であったサワビー Sowerby [1757 ~ 1822 年] とその父 F. J. フェイン博士とシグムンド博士により設計された；そして植物科学の研究者の努力を支える準備が完了した（『フレデリック・J・フェイン博士回顧録』1886 年 *Memoirs of Dr. Frederic J. Fane*）。

*ドールストンおよびドウボヴォワールタウン・アマチュア菊協会の展示会は毎年開かれ、世話をして関心があれば何が実現できるかの実例となっている。

園芸の進歩について速足で振り返ってきた中で、キュー王室庭園の際立った位置づけについて十分に指摘されてこなかった。この庭園は 1760 年頃、ジョージ 3 世の母であるプリンセスオブウェールズにより創設されたものである。大変優雅でオリジナルな詩「植物園」 1791 年において、エラスムス・ダーウィン Erasmus Darwin [1731 ~ 1802 年] はキューの持つ夢のような魅力について、いつもの誇張した詩句で仄めかしている： -

(仮訳)

“So sits enthroned, in vegetable pride,
Imperial Kew by Thames’ glittering side;
Obedient sails from realms unfurrow’d bring
For her the unnam’d progeny of Spring;
Attendant Nymphs her dulcet mandates hear,
And nurse in fostering arms the tender year;
Plant the young bulb, inhume the living seed,

王座に座るように、野菜は盛りを迎え、
テムズのきらめく側に広がる王室キュー庭園は；
耕されぬ王国から忠実なる風がもたらすものは
お庭のために名もない春の子どもたちを；
お供の妖精たちはその甘美な役目を耳にし、
そして抱える腕の中でか弱き季節を慈しむ
若い球根を植え、生きている種を埋め、

Prop the weak stem, the erring tendril lead;
Or fan in glass-built fanes the stranger flowers,
With milder gales, and steep with warmer showers.
Delighted Thames through tropic umbrage glides,
And flowers antarctic, bending o'er his tides;
Drinks the new tints, the sweets unknown inhales,
And calls the sons of Science to his vales."

か弱い茎を支え、はみ出た巻きひげを導く；
それともガラスの神殿の珍しい花に風を送るは、
柔らかいそよ風で、そして暖かい雨を注ぐ。
喜び溢れるテムズは熱帯の日陰の中を流れ、
南極の花は、その流れの上に覆いかぶさる；
新しい色調を飲み、知らない喜びを吸い込む、
そして科学の息子たちをその谷間へと呼ぶ。

キューの重要性はウィリアム・エイトンの管理のもと徐々に増大していった。この有能な庭師は 1731 年に生まれ、フィリップ・ミラーの影響のおかげでキューの植物管理責任者に任命された。彼は 1789 年キューで栽培されている植物のカタログを発売した。それぞれの植物には原生地、持ち込まれた時期、チェルシーでフィリップ・ミラーの手で栽培されていたものの彼自身の記憶に基づく記録が付記されていた。エイトンは彼の息子ミカエルの助けを得て、どれがピーター・コリンソンが持ち込んだ植物であるかを明らかにした；ハンマースミスのジェームズ・リーおよび、ジェームズ・シェラードの庭師であったノウルトンも可能な情報を渡した。植物はリンネの分類に従い配置され、5000 から 6000 の品種が含まれていたが、この数は第 2 版では 1 万 1000 種にまで増やされた。この第 2 版にはドライアンダー Dryander [1748 ~ 1810 年] と R. ブラウンが多大な貢献をし、1810 年から 13 年にかけて若い方のエイトンによって出版された。ウィリアム・エイトンは 1793 年に亡くなり、彼の息子、ウィリアム・タウンゼント・エイトンがその後を引き継いだ。それ以来、そこに関わった多数の有能な植物学者のもとで、キューはますます世界の植物関係の組織の中で第一等の地位を果たすことになった。今世紀の著名な植物学者、すなわちリンドリー、フッカー、ブラウン、スミス、ラウドン、ヘンスロウ Henslow [1796 ~ 1861 年]、サワビー、そして偉大なダーウィンその人自身、その他大勢の人々の業績に関して語ることは不可能であるが、これらの人物こそが今世紀の素晴らしい進歩をもたらした人々である。そして今この 19 世紀の終わりにあって、イングランド国内だけではなくその帝国全体を通じて、現場の庭師から敬意と称賛の眼差しで尊敬されているまだ健在の人々については言うまでもない。

イングランドでは最も質素な家にも庭が造られてきたように思える。早くもチューダー朝時代には、農民は自分の小さな家（コテージ）の入口付近に何種類かの植物を育てようとした；多くの古いコテージは何世紀もそこに立っているブドウの木で依然として覆われており、また多くのリンゴの木が毎年毎年邪魔されることなく赤い実を稔らせてきたが、一方、すぐ近くのもっと堂々とした大邸宅の庭園は消え去ってしまった。最近では、見捨てられた昔ながらの植物をまた育てたいという気持ちから、コテージの庭にそれを探しに行く人がたくさん出てきており、その結果、今まで長い間、目立たない場所に隠されて残されてきた宝物が数多く発見されている。コテージの住人によって今育てられて

いる果物や野菜は、金持ちだが腕の劣る隣人にとってお手本となっていることも多い。一番寒い冬にコテージの窓際に明るい花が一杯あるのを見ることは素晴らしい。町の中にあっても貧しい人が「自然の存在を知る手掛かり」として手元にちょっとした植物を置くことに努めているのである。

(仮訳)

“Mark the dim windows ye shall pass	汝らが通り過ぎるほの暗い窓に注意せよ
And see the petted myrtle here;	そしてここに大事にされているギンバイカを見るがよい;
While there upraised in tinted glass,	そちらには彩られたガラスの中に高く持ち上げられた、
The curling hyacinths appear.	らせん状に巻き上がるヒヤシンスが現れる
The gay geranium in its pride	明るいゼラニウムは今が盛り
Looks out to kiss the scanty gleam;	外を見晴らすのはかすかな光に口づけるため;
And rosebud nurslings by its side,	そしてその横のバラの蕾の宝物は、
Are gently brought to share the beam.	日の光を浴びるためやさしく持ち出される
Hands with their daily bread to gain	毎日のパンを得た労働者たちは
May oft be seen at twilight hour,	夕暮れ時に見られることも多からう、
Decking their dingy garret pane	彼らのすすけた屋根裏の窓ガラスを飾るのは
With wreathing stem or sickly flower.”	花輪を作る茎や弱々しい花でもって
ELIZA COOK	エリザ・クック

今世紀半ばまでは広く見られたイタリア風のデザインは、当時急拡大していた新しい花
卉栽培者の花にふさわしいように容易に対応できた。「ベッディングアウト」 bedding out
[季節ごとの植え替え作業]として知られる流行が始まり、何世紀にもわたり我われの庭園の
主役であった昔風の植物はこれらの新参加者に席を譲るため消し去られた。モリスが 1825 年
に書いた風景式庭園に関する随想で (*『風景式庭園に関する随想』リチャード・モリス著 1825 年
Essay on Landscape Gardening. By Richard Morris) 彼は当時大変新しかったこの計画を主張し
た。「フラワーガーデンの美しさは、夏の季節には自由に咲き乱れる若くて元気な温室の植
物を花壇に植えることで高まるかもしれない。温室に一定の広がりがあれば、この目的の
ために、十分な量の植物が毎年栽培されるべきであり、5 月半ばあるいは 5 月末頃までに花
壇に植えられなければならない。以下は、この品種の最も美しいものの仲間である：アナ
ガリス・グランディフローラ [ルリハコベ類 サクラソウ科] *Anagallis grandiflora*、アナ
ガリス・モネリー [同] *Anagallis Monelli*、ヘリオトロープ・グランディフローラム [キダ
チルリソウ類 ムラサキ科] *Heliotropium grandiflorum*、フクシア・コクシネア [アカバ
ナ科] *Fuchsia coccinea*、ロベリア・エリヌスとユニデンタータ [ロベリア類] *Lobelia Erinus*
and *unidentata*、ヘミメリス [ゴマノハグサ科] *Hemimeris urticifolia*、アルストロメリ

ア [ユリズイセン類] *Alstroemeria peregrina*、ブバルディア・トリフィラ [アカネ科] *Bouvardia triphylla*、各種ゼラニウム *Geraniums of sorts*、リクニス・コロナリア [スイセンノウ ナデシコ科] *Lychnis coronaria*、リナム・トリギナム [キバナアマ アマ科] *Linum trigynum*。これらはモリスの提案であるが、その他の植物であるペチュニア、ジニア [百日草類] *Zinnias*、ベゴニア、アゲラタム *Ageratum*、カルセオラリアなどさらに多くのものが現在ならリストに付け加えられるであろう。このほかにも、外国の植物、コリウス *Coleus*、エケベリア [ベンケイソウ類] *Echeverias*、セラステウム [ミミナグサ ナデシコ科] *Cerastiums*、ドラセナ *Dracenas* などがあり、あわせてアルテルナンテラ [ツルノゲイトウ類 ヒコ科] *Alternanthera* などの絨毯花壇に使われる背の高くないものがある。現在では色彩の選択、植物の配置に今まで以上の技巧が使われ、その結果優れた効果がこれらの組み合わせにより生み出されている。優美でより羽飾りのような feathering 植物が昔ながらの花壇の花の間に植えられ、それはたとえば単色のヴィオラ self-coloured viola のような下地のところに、背の高い支柱で支えられたアイビーゼラニウム、ドラセナ、カンナ *Canna* あるいはハゴロモノキ [ヤマモガシ科] *Grevillea robusta* を植えるようなものである。当初のベッディングアウトとは、できる限り大きな炎の色を生み出すために単に花壇を花で埋めることが本来のねらいであった。トレンタム庭園は 1859 年に「驚くべき量のゼラニウムとカルセオラリア」と描かれており、このことだけが多くの場所での庭師たちの目標であった。

A. E. ブルック Brooke [1821~1910 年] 著のとても大きなフォリオ版の本には、イングランドで当時一番優れた庭園と考えられるものはどういうものが示されている (*『イングランドの庭園』A. E. ブルック著 1858 年)。そのほとんどがイタリアのデザインで、花壇は派手ではあるが枯れる花で埋められている。彼が説明する中には、ウォーバン、ワーズレー、イートン、トレンタム、ハワード城、そしてテドズリーについて触れられ、これらはネスフィールド Nesfield [1793~1881 年] がデザインし、すべて 1845 年から 1858 年の間に設計されたものである。サー・ジョーゼフ・パクストン [1803~65 年] はチャッツワースのデヴォンシャー公爵 Duke of Devonshire の庭師であり、『植物マガジン』の編集者としてよく知られていた。彼は大博覧会 [1851 年ロンドンのクリスタルパレスで開かれた世界初の万国博覧会] の建築設計者であり、その功績によりナイト爵位を与えられた；その後シデナム Sydenham にクリスタルパレスが移転し構造物が再建築された時、パクストンはシデナムの庭園をイタリア風に設計した。しかし嗜好というものはこの大雑把な事例からだけで判断されてはならず、と言うのも格式ばったイタリア風デザインだからと言って魅力的な庭園はいくつも存在しているからである。既に引用した庭園のほかにも、優れた実例としてヘアウッドがある。それはヘアウッド夫人により計画され、噴水と石の手すりのデザインはサー・チャールズ・バリー Sir Charles Barry [1795~1860 年] が行った。



[図 13-2] ヘアウッド

シュラブランドズ（+サフォーク、ドゥ・ソーモレズ卿の所有）の設計は 1830 年頃サー・ウィリアム・ミドルトンの手により開始された。シュラブランドズの館の正面にはヘアウッドのものと同じような花壇のある広いテラスがあり、ただし噴水はなく、そこからは長い階段が下の方の半円状のテラス庭園へと続いている（図を参照）。



[図 13-3] シュラプランズ

このスタイルのすべての庭園がそうであるように、ここも以前は夏が来るたびに「ベッドアウト」された。これによりどれだけ膨大な費用が掛ったかはすぐわかるし、またこのような状態で庭園を維持していくことがいかに困難なことかも容易にわかる。と言うのも、花壇が1年間のうち4カ月以外は何もないということでもない限り、春にはヒヤシンス、クロッカス、チューリップなどの花壇がなくてはならず、同じく夏になればゼラニウムなどの花壇がなければならないからである。

現在では膨大な種類の耐寒性多年草植物が栽培されており、それらはほんの少しの世話をするだけでこの国で十分生き延びるであろう。また、もしこの中から賢明な選択がなされるならば、花壇はもっとデリケートで、初霜にちょっと触れただけで枯れてしまうような植物で夏には明るくすることができるであろう；そして庭園の美しさを相当程度長続きさせることが可能となろう。ヴィオラとか「タフテッドパンジー」 tufted pansies [スミレを改良した小型のもの、「ピオラ」として売られている] のようなものを植えれば、早春から晩秋まで色彩の広がりが得られることになる。シュラプランズの庭園はこのような考えのもとに、W. ロビンソン氏 Robinson [1838~1935年] の提案に従って造られ、大きな成功を収

めた。花壇はバラ、ナデシコ、カーネーション、そして多くの耐寒性植物で埋められ、色彩の広がりも巧みに配置された。図版に示された一つの花壇は真ん中にベニバナサワギキョウ *Lobelia cardinalis*、縁取りにはシルバーナツブウィード [銀白色 (シルバー) の葉を付けるヤグルマギク的一种] *Centaurea ragusina* を配し、これは 1 年の遅くまで衝撃的な効果を生み出した。「ベッディングアウト」への熱狂が盛り上がった時、消滅させられ、また多くの場合容赦なく引きちぎられ捨て去られた多くの耐寒性植物を、今我われの庭園に連れ戻したことは 19 世紀末の最大の改良である。それらは再び自分の適切な居場所を取り戻し、またわが国の寒い気候に耐えるような植物のリストを毎年膨らませているあらゆる新しい品種と一緒にあって、40 年前の堅苦しい花壇の植物の時に比べれば、はるかに素敵な効果を生み出すことが可能となろう。しかしながら誰もこれらの半耐寒性の植物をすべて捨て去ってしまうことなど望みはしないであろう。我われの温室、塊茎ペゴニアやその類の花により明るい色彩の強い輝きは、素晴らしい光景であり、現場の目から見ても、夏の間、この中のいくつかを外に植えることで温室の中に余地を生み出すことはよい計画である。このやり方は、庭園全体を一杯にするためガラス温室のすべてをゼラニウムの育成に注ぎ込むのとはまったく違うものである。ベーコンの目的は 1 年中すべての月に庭園に花を咲かせることで、彼はその随想の中で、一つひとつの季節について花の名をいくつか挙げている。確かにあれから 3 世紀が経った今、我われとしては彼の目標を達成できなければならない。またどの月も輝かしい花がないなどということがないようにしなければならない。

(仮訳)

“The daughters of the year

One after one through that still garden passed,
Danced into light and died into the shade.”

SHELLEY

1 年を織りなす娘たちは

一つまた一つとあの静かな庭園を通り過ぎ、
光の中に踊りそして影の中へと消える

シェリー

近年持ち込まれた多くの植物のうち、高山植物 *Alpines* の仲間が非常に大きく取り上げられてきた。もともとの自然の生育地が岩の上であったり、石の割れ目であったような極めて多数の植物を今我われは手にしている。原生地の丘と同じ生育環境をここイングランドにおいても、できるだけ近い形でこれらの植物に与えようとするのは実に合理的なことである。この結果、何箇所かロックガーデン *rock gardens* が造られたが、それは昔風に石を積み上げて、ロックガーデンの名のもとで出回っていたものとはまったく違うものである。これらの新しいロックガーデンはあらゆる点でうまくいっており、この国では育つのはほとんど難しいと考えられた珍しい高山植物が今はすくすくと育てられていることからわかる。典型的なロックガーデンの図版はバツフォード (グロスターシャー州) のとても大きなロックガーデンの一部であり、これはここ数年内にミットフォード氏 *Mitford* [1837 ~ 1916 年] により造られたものである。



[図 13-4] ロックガーデン バツフォード

キューのロックガーデンもよく知られた事例である。毎年そこには興味深い新しいものがある。世界のほとんどすべてと言ってよい山岳地帯で採集された植物をロンドン市内から数マイルという完全な本拠地で見るといのは素晴らしいことである。

最近数年間において展開されてきたもう一つのガーデニングは亜熱帯ガーデニングである。ロビンソン氏のご親切にも私に対して、20年ほど前にパリからここにやって来たこの種のガーデニングは、「ベッディングアウト」の堅苦しさを何かしら救ってくれた、と指摘してくれた。もっとも耐寒性の花を目指す新しい動きに比べるとそれほど重要な改良とも思えないが。カンナ Cannas、カラディウム [サトイモ科の観葉植物] Caladiums などのような仲間が花壇にあると、あまり堅苦しくならなくて済むのに役立つ。また夏の数カ月はより耐寒性のある種類の木生シダ [ヘゴ] tree fern やヤシを外に移植することで優れた結果が得ることができる。とは言え、一番優れた亜熱帯ガーデニングのやり方は常設的なものである。イングランドの一番寒い地区においてさえ、熱帯的な様相を示す数多くの植物が育つことであろう*。

* 『亜熱帯庭園』 W. ロビンソン著 第2版 1879年 *The Sub-tropical Garden*. By W. Robinson

『竹の庭』 パートラム・フリーマン・ミットフォード著 1896年 *The Bamboo Garden*. By Bertram Freeman Mitford

ノーフォークとサフォークでは遅霜が庭づくりをする人々にとって大変やっかいなことで

あるが、様々な竹 bamboos が元気に育っている；ヤダケ *Bambusa Metake*、メダケ *Simonii*、ベニホウオウチク *viridiglaucescens*、それとモウソウチク *edulis* は完璧に耐寒性であり、そのほかにもメギ類 *Berberis*、ヤツデ *Aralias*、グンネラ [オニブキの一種 ゲンネラ科の観葉植物] *Gunnera scabra*、アリストロキア [ウマノスズクサ科] *Aristolochias*、オオハナウド類 [セリ科] *giant Heracleums*、ダンチク *Arundo Donax*、ウルシ類 *Rhus* とシモツケ類 *Spirea* の何品種、イタドリ *Polygonum cuspidatum*、ギョリュウ *Tamarix*、ユッカ *Yucca*、アマドコロ *Polygonatum multiflorum*、Solomons seal [*Polygonatum multiflorum* のコモンネームは Solomons seal となっており重複]、タケニグサ *Bocconia cordata*、そしてアカンサスの何種類など多くのものがあり、加えてシンジュ *Ailanthus glandulosa* のような背の高い木とイロハモミジ *Japanese maples* がある：これらのものは、小さなシダや草などと一緒に草の上に集められると大変熱帯的な効果を醸し出した。こういう植物からなる緑の庭園というものは明るい花が咲く植物とはまた違った心地よい変化と言えるだろう。イングランドのより暖かい地区ではこれはもっと簡単に実現できるだろう。耐寒性に優れたヤシの中にはよく育っているものもあり、一般的なイングランドの木に混じって自分の家に見えるように見えるものもある。

(仮訳)

<p>“But fair the exiled palm tree grew Midst foliage of no kindred hue; Through the laburnum’s dropping gold Rose the light shaft of orient mould, And Europe’s violets faintly sweet Purpled the moss-beds at its feet.</p>	<p>しかしながら国外追放されたヤシの木は見事に育った 親戚の顔が一つもない葉っぱの中であって； キングサリの垂れ下がる金色を通して バラ 東洋の型をした軽い茎 そしてヨーロッパのスミレはかすかに甘い香り 紫色に染まりその足元には苔の花壇</p>
<p>Strange looked it there! the willow streamed Where silvery waters near it gleamed; The lime-bough lured the honey bee To murmur by the desert tree, And showers of snowy roses made A lustre in its fan-like shade.”</p>	<p>そこでは風変わりに見えた！ ヤナギはなびき その近くで銀白色の水が輝いていた場所で； ライムの大枝はミツバチをおびき出した 砂漠の木の脇で木の葉がざわめく そして雪のようなバラのシャワーが作るのは 扇のような木陰の中の輝き</p>

Mrs. HEMANS

ヘマンズ夫人

コーンウォールの一部は気候がとても温和で多くのものがよく育つので、それらはイングランドのほかの場所では温室の植物であると考えられている。この地域には、他の恵まれない地方から来た庭師たちが腰を抜かすような庭園がいくつかある。Pengerrick、メナビリー *Menabilly*、ヘリガン *Heligan*、トレゴスナン *Tregothnan* そしてカークルー *Carclew* はコーンウォールの庭園の中で優れたものに属している。ツバキは立派な木に育ち (*ハン

プチャー州およびその他いくつかの南部、西部の地方でも)、シッキムシャクナゲ *Sikkim Rhododendrons* は外で開花し、ツバキカズラ *Lapagerias* はツタのように雨風の当たらない壁の上に育つであろう。カークルーではシャクナゲのトムソニー *Rhododendrons Thomsoni*、ホッジソン *Hodgsoni*、キャンピロカルパム *campylocarpum*、アルゲンテウム *argenteum* そしてその他多くの寒さに弱い品種が昨春は花で覆われた。その庭園では多くの面白い植物がよく育っており、これらはイングランドでは普通温室に植えてあるものである。メキシカンオレンジ *Choisya ternata*、エンボスリウム [ノトロ ヤマモガシ科] *Embothrium coccineum*、セラリートップパイン [マキ科] *Phyllocladus rhomboidalis*、ボックスリーフアザラ [ヤナギ科] *Azara microphylla* がその仲間で、ヒマラヤヤマボウシ *Benthamias* の種子は最初、サー・アントニー・ブラー *Sir Anthony Buller* [1780~1866年] によりセイロンからイングランド本国に送られ、元気に育った：それらが最初に植えられたヘリガンの庭園には、今もなおオリジナルなものの何本かが育っている。さらにもっと好ましいのがシリ - 諸島の気候で、最近ではこの優位性を生かしてスイセン *narcissi* が栽培されてきている。ドリエン・スミス氏 *Dorrien Smith* がその栽培を始め、この10年間のうちにこの商売は着実に拡大し、何千もの切り花がロンドン市場に送られている*。島では2月に何エーカーものスイセンが開花し、これらは摘まれてロンドンに送り出される。下の図版はクチベニスイセン *Poet's Narcissus* の畑であり、そこにはかなりの数のポリアンサス *polyanthus* の仲間も栽培されている。ラッパズイセン *daffodil* は最近人々の注意を特に引くようになった花である。それぞれのタイプが目を見張るほど改良されてきており、新しいラッパズイセン *Trumpet* の仲間には特別に美しいものもある†。

*「35トンの花、主としてスイセン、あるいは4849個の箱に入れられた325万8000個の花、昨日シリ - 諸島からペンザンスに到着」 - デイリーテレグラフ 1896年2月26日

†『ナルキッソス、ラッパズイセンの花』バー著 1884年 *Ye Narcissus, a Daffodil Flower* By Barre



NARCISSUS IN THE SCILLY ISLES.
FROM A PHOTOGRAPH BY GIBSON, PENZANCE.

[図 13-5] シリ - 諸島のスイセン
ギブソンによる写真より ペンザンス

春の庭園は今や数本のチューリップとヒヤシンスが花壇で咲いている時代ではもはやなくなつて、こういったスイセンやその他多くの球根植物、たとえばシベリアアツルボ [キジカクシ科] *Scilla sibirica*、チオノドクサ [雪解ユリ キジカクシ科] *Chionodoxa Luciliae* またはワイルドチューリップ *Tulipa silvestris* などが土着化できて、草の上、林間の空き地、あるいは芝生の縁に大量に植えられれば、夏の花が現れる前に鮮やかな効果をもたらすであらう。そして花が終わってももし必要ならば残っている草とともに刈ってしまうこともできる。球根栽培はイングランド北西部の工業地帯で人気のある娯楽である。このような嗜好はフランドルの織工たちが向こうから携えてきたと思われており、その昔、彼らが初めてイーストアングリア、エセックスおよびケントに移住した時、これらの植物への愛好心を低地帯国 [現在のオランダ・ベルギーなど] から一緒に持ってきたことに遡る。加えてベルボワールにも極めてうまく運営されてきたこの類の春の庭園がある。花壇は「忘れな草」 *Forget-me-nots*、ネットアイリス [ミニアイリス] *Iris reticulata*、シベリアアイリス *Iris sibirica*、マンテマ *Silenes*、ヴィオラ、ニオイアラセイトウ *Wall-flower*、ヒューケラ [ツボサンゴ ユキノシタ科] *Heuchera sanguinea*、オーブリエチア [ムラサキナズナ アブ

ラナ科] Aubretias、セラスチウム [ナツユキソウ ナデシコ科] Cerastium tomentosum のような花で満たされていただけでなく、多くのプリムラ、アネモネ、リンドウ類 Gentians、シクラメンがあり、また各種の高山植物が広大なロックガーデンに土着化されている。

低木の植え込み、草で覆われた土手とか自然の中に植物を土着化させる考えは、19世紀後半の新しい出発点でもあった。 W. ロビンソン氏は、その著書、『自然式庭園』 *Wild Garden* および『イングリッシュフラワーガーデン』 *English Flower Garden* を通じて、誰よりもこの嗜好を取り入れるために尽力した人物である。花をこのようにして自然体で分類することにより、美しい絵のような効果を得ることができる。これは「風景式庭園」と逆のやり方で、風景式庭園が狩猟地のような外観の緑の起伏を館のところまで持ってきて、フラワーガーデンを潰してしまうのに対し：こちらはフラワーガーデンを周辺の田園の中にまで広げていくものである。 自然式ガーデニングの技法 the art of wild gardening を現場で実施するにあたって、すなわち、自生種ではないがわが国の気候の中で耐寒性があり、そしていったん植えられたら自生する植物を土着化すると、「整形式庭園」を消してしまう必要はなくなることになる。 整形式庭園は確かに館の近くでは最もふさわしいと言えるかもしれないが、庭園のデザインは建築と調和すべきである。このような庭園は、もし寒さに弱い植物や特別な世話、処置が必要な植物を育てる時には必要であるが、この整形式庭園の向こう側に、また何らかの適当な囲いによって分離されれば、自然式庭園は、賢明な方法で植栽が施されれば今後続く面白さと喜びの源となる。ここに掲載したおよそ10フィートの高さに及ぶ何本かの巨大なユリの図版はこのような「自然式庭園」が生み出すことができる多くの効果の一つを提示している。このユリは森の中に植えられ、広がりつつ元気に成長し、周りによく溶け込んでいるように見える。背景の低い茂みはキスツス [ゴジアオイ ハンニチバナ科] *cistus* の仲間ですりーの雑木林にすべてうまく馴染んでいる (*ミズジケルの庭園、マンステッド、ゴダルミング)。



LILIES IN WILD GARDEN.

〔圖 13-6〕 自然式庭園のユリ

小川や湖の土手、さらには水そのものの中にすら、自然式ガーデニングにとっては大きな

展望が開けている。マリアック [1830 ~ 1911 年] によりフランスで育てられた新交配種のスイレンがフランスからこの国に来て、庭園にとって最新の仲間の一つとなり、数年のうちにその価値が認識されるようになった†。日本から輸入されたユリの数々は 19 世紀の庭園にとって一味違う別の性格を付け加えた。耐寒性のシャクナゲとツツジの仲間は、東から西から集められ、現在ではほとんどあらゆる庭園や公開狩猟地 public park で強烈な絵姿を生み出しており、イングランドにこのような宝物がなかった時代を思い浮かべることがほとんど不可能なくらいである。

† *Nymphaea rosea*, *N. sulphurea*, *N. odorata*, *N. Marliacea*, その仲間、*rosea*, *rubra*, *carnea* 等 [スイレンの品種]

最近では整形形式庭園に好意的な動きが出てきており‡、庭園に関する昔の仕事を研究することが当然のことながらこれを増やす傾向へとつながっている。アスコットの庭園は§、ここ 15 年間のうちに設計されたもので、一部は整形形式となっており、昔の刈込まれたイチイとツゲの木の素晴らしいコレクションがある。これらのうち何本かは近所の小屋の庭から移植されたが、多くはオランダから持ち込まれた。その他の整形形式庭園は今世紀中にイングランドで造られてきており、これらは昔のものとその美しさは変わらない。ケント州のペンスハースト *Penshurst*、チェシャー州のアーリー *Arley* ¶、ノーフォーク州のブリックリング *Blickling*、そしてサマセットのモンタキュート *Montacute* は広く知られた事例であるが、すべてスタイルが異なっており、またその美しさにより、整形形式庭園が持つ多くの優れた点について、文字で書かれたどんな議論も及ぶことができない明確な証言となっている。

‡ 『整形形式庭園』 *The Formal Garden* ブロムフィールドおよびトーマス共著 『庭園の技法 昔と今』

§ レイトンブザードの近く、レオポルド・ロスチャイルド氏所有

¶ P. エガートン・ウォーバートン氏所有 288 ページ図参照 [本誌 図 13 - 1]

庭園は家の付属物であると常に考えられ、常にそうでなければならぬと考えられたので、もし見た目をよくしたいならば、庭園は家と調和していなければならない。誰もイタリア風の館の正面にエリザベス朝の庭園を置きたいとは思わないであろうし、また逆に最新型の郊外の別荘の正面にある昔風の整形形式庭園はふさわしいとは見えないであろう。とは言え、何を選ぶかは建築、情景、気候ほか様々なことに左右されるから、様式に関して厳格で不動のルールは作ることはできない。

多くの美しい庭園がイングランド全体にわたり存在しているので、知らないとの言い訳の余地はない。庭園の設計に関わった者なら誰でも、どの様式であろうとその実例を目にすることができる。ノウル、ハム *Ham*、プロミッチ城、レスト *Wrest*、メルボルン *Melbourne*、ハドンそしてレベンズなどの場所が存在しており、インスピレーションを欠くなどということはありません。他の芸術におけるのと同じく、現代はガーデニングの発展の時代であ

り、もし庭園のデザインについて丹念に研究されるならば、また傷つきやすい植物と同様に耐寒性の植物が適切に利用されたなら、19世紀の最新の庭園は、かつてイングランドで見られたどの庭園をも容易に凌駕するであろうと思われる。